

2013年(平成25年)4月17日 水曜日 (10)

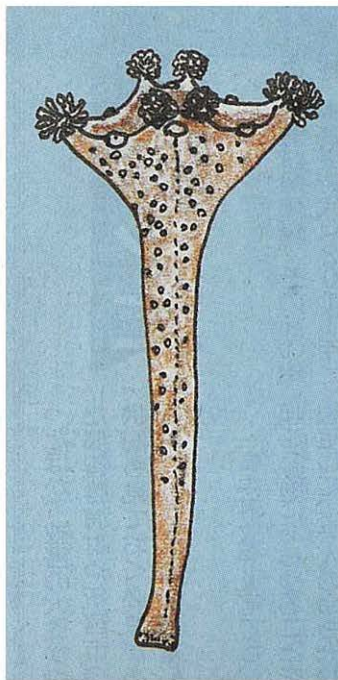
ムシクラゲ

久保田 信

番外編6



ムシクラゲは、細長い「なが虫」のような体形なのでこの和名が付けられた。長さ15ミリの小さい体で、直径は最大7ミリまでである。海藻上で付着生活を送っており、クラゲらしい浮遊が全くできないが、尺取り虫のように海藻上を移動する。体は



尺取り虫のように動くムシクラゲ (内田1936 改写)

淡い赤褐色で白斑があるが、暗緑色のものもある。ホンダワラやヒジキ、アマモなどの間に入ると、それらに溶け込んでしまつて姿がなかなか分からない。

ムシクラゲは傘の形が十字形なので、文字通り、ジュウモンシクラゲ類に所属する。北海道から九州にかけての沿岸に分布するが、田辺湾からのこの類の正式な記録は一度もなされていない。県内ではかつて加太でムシクラゲが発見されたことがある。ただ、昨今は地球温暖化なので、今後、残念ながら見つかりそうにもなさそう。

下半身にあたる柄の部分か

ら上方が萼(がく)部だが、そこは他のこの仲間のようには大きく開かない。萼部の端には短い4本の腕がぐるりと取り巻き、少し開きかけた花のように見える。本来の腕の数は8本なのだが、ムシクラゲでは2本ずつの隣り合った腕が互いに連結して十字形となっているのも特徴だ。おのおの腕の先端には束になった触手群がある。触手の先端は球状で毒針の刺胞をたくさん装填(そうてん)している。それぞれ1本の短い触手は、太鼓のばちのような形状である。

萼部の縁に規則正しい間隔をおいて感覚器が全部で8個ある。ここで体のバランスを取っている。萼部の体内には獲物を完全にグロッキーにする役目を果たす触手のような胃糸がたくさんある。

幼生時代も含め、本種は生涯を海の底で暮らすクラゲ界の変わり者なのである。

(京都大学准教授)